みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

国際人類学・民族学連合IUAES 2009 第16回昆明大会の参加報告

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 国立民族学博物館
	公開日: 2012-02-29
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 韓, 敏
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4511

資料と情報

国際人類学・民族学連合 IUAES 2009 第16回昆明大会の参加報告

文・写真 韓 敏

IUAES第16回昆明大会のロゴマーク（2009年）。

国際人類学・民族学連合（The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences: IUAES、通称ユニオン）第16回大会は、2009年7月27日～7月31日中国昆明の雲南大学で開催された。国際人類学・民族学連合は1934年に創設され、人類学の国際組織として最も古いものである。今回のテーマは「人類、発展と文化の多様性（Humanity, Development and Cultural Diversity）」とされ、100あまりの国と地域から4300人の人類学・民族学者が参加し、156の分科会が実施された。

このテーマはまさにグローバル化する21世紀の人類社会が直面している問題である。多角的な視点から議論するために、分科会の構成条件は3カ国15名以上の参加者と設定されたが、2008年から2009年に延期されたさいに、構成員の最少数は15名から8名へと調整された。今回はロゴマークも考案され、それは「山、水、人と文の四つの漢字と大会開催地の中国・昆明の中国語と英語の表記によって構成されている（……）手足を自由に伸ばしている3人の姿が多様な生活様式と多元的文化を表している」（国際人類学与民族学第十六届連合会大会組委会　2009：15）。

分科会の主催者、報告者として参加した筆者はここで大会の概要と感想を報告してみたい。

「観光とグローカリゼーション——東アジアの視点から」の分科会

筆者主催の分科会「観光とグローカリゼーション——東アジアの視点から」は日本、韓国、中国、台湾の12人の人類学者によって構成され、7月29日に雲南大学の文淵楼で開催された。分科会の構想は2007年に始められ、国立民族学博物館2009年度機関研究のひとつでもある。12人が観光客、観光地のホスト社会、観光プランナーと行政に焦点を当て、家族、地域、民族、国の景観、歴史、記憶と文化がいかに構築され、表象され、消費されているのかを取りあげ、観光がホスト社会とゲスト社会に与えた影響を検討した。次に分科会の参加者と演題を進行順に紹介しておく。

パネル1
ホスト社会からみた観光と文化表象

陳天璽 国立民族学博物館
「民族文化の再構築とローカル化
——観光地としての横浜中華街を事例に」

長谷千代子　九州大学
「宗教文化の外観
——雲南徳宏の観光と日常生活から」

清水拓野　神戸女学院大学
「中国伝統戯? 学校の観光地としての潜在価値——西安秦腔の事例分析」

王維　香川大学
「ローカル化文化と日本観光
——外来文化と伝統文化の事例研究」

パネル2
空間、時間と文化の体験と消費

陳黎明　東京大学
「台湾観光客の観光体験に関する民族誌的研究
——日本における台湾観光客の事例研究」

Christian J. PARK　General Education Division Hanguk University of Foreign Studies (South Korea)
「金剛山観光における国境の再構築」

小野真由美 東京大学
「東南アジアにおける日本人高齢者の観光客のロングステイ型観光」

田中孝枝 東京大学
「観光客を送り出す社会の観光社会性
——東アジアと東南アジアにおける日本人の観光」

パネル3
歴史、景観と遺産の再構築と再評価

堂下惠 星稜大学
「里山、人工的景観と日本の農業観光」

韓敏 国立民族学博物館
「観光とローカル文化の表象
——雲南の華僑の故郷、和順郷を事例に」

今中崇文 総合研究大学院大学
「観光と都市開発
——西安回民街を事例に」

宗暁蓮 福岡女子大学
「観光お土産品のローカル化と均一化
——雲南省麗江大研を事例に」

12人の報告が一定の反響をおこした。発表者は会場のメキシコ、中国、韓国、日本、アメリカなどの人類学者といっしょに、台湾における日本観光のパターンと動機、1964年以降の日本人アジア観光のイメージ、老齢化・少子化社会にともなう日本のロングステイツーリズムの展開、朝鮮半島の国境線観光の政治性、エコツーリズム、フランス発のエコ博物館理念と中国の文化生態村の実践、伝統的地方劇団と演劇学校の観光化の可能性、観光化された宗教文化の真正性などについて意見交換をおこなった。カリフォルニア大学バークレー校の観光人類学者、N・グレーバン教授は最後に総括コメントをおこない、石森秀三教授が立ちあげた観光に関する民博の共同研究会や、山下晋司教授などによる観光人類学研究の流れをふまえ、今日日本で活躍している若手研究者の観光

分科会の会場雲南大学文淵楼。

分科会の発表者とアメリカ、中国、メキシコ、日本などの人類学者。（撮影：劉東東）

世界土着文化のコーナーで展示されているチベット医学の妊娠・出産図。

人類学研究の成長を評価した。

IUAES第16回昆明大会に関する3つの印象

筆者は今回を入れてIUAESに3回参加したことがあり、前の2回は1998年のアメリカ、ウィリアムスバーグの第14回大会と、2000年の北京中間会議であった。今回の印象は3点ある。

ひとつ目の印象は数多くの分科会と展示会の同時開催である。156の分科会が5日間の間に雲南大学文淵楼の60の教室で開催された。中国映像人類学会主席、庄孔韶教授主催の22の映像人類学分科会が別途に設けられ、367の作品が参加した。

このほかに6つの展示会、「IUAES60年回顧展」、「多彩中華――中国民族工作成就展」、「世界各国本土文化展」、「中国人類学百年展」、「人類学民族学図書展」、「研究機構及び個人学術展」が開催され、世界の多様な文化と人類学の研究成果が展示された。筆者はそのうちの「世界各国本土文化展」と「多彩中華――中国民族工作成就展」を見学した。各国の伝統文化が服飾、飲食、儀礼、婚姻、家庭、舞踊、芸術と宗教信仰の実物と写真をとおして示され、多くの学者を引きつけた。伝統的チベット医学の妊娠・出産図はその一例である。日本コーナーではアイヌ神話集、儀礼用食べ物と家族の食事風景などが紹介された。

2点目の印象は参加者の年齢・分布地域と発表スタイルの変化である。前2回と比べて、今回は若手研究者、欧米以外の国と地域の研究者が大半を占めている。また、分科会は文字通りの口頭発表が主流で、スライドによる発表は、1割未満であったのに対し、今回は各会場にパソコンとスクリーンが設置され、パワーポイントによる発表が9割ぐらいであった。

3点目の印象はボランティアや食堂に見る学会運営である。多数のボランティアが各会場で中国語、英語などの言語で案内をしていたため研究発表と会場間の移動はスムーズにできた。本企画にかかわった雲南大学何明教授によると、今回600人のボランティアの大学生が動員された。雲南大学と雲南民族大学から選ばれた、英語と他の外国語の堪能な大学生であり、2008年から訓練を受けていた。

学会開催中に雲南大学と雲南民族大学の5つの食堂が開放され、中華料理、洋食とムスリム料理の昼食バイキングが提供された。学会参加者はIDカードを示せば無料で食べることができる。このほかに5つの見学イベント（雲南石林県のハニー族村、彌勒県のイ族村、通海県の回族村、玉渓市の漢族村大営街、雲南民族博物館）も用意されたが、分科会の時間調整に奔走した筆者は見学イベントに参加することができなかった。

多数の分科会と多様なイベントの実施でにぎやかな一面があったと同時に、分科会日程、発表者・演題の遺漏、HPの情報と配布冊子の不一致などの問題が多発している。それには大会の延期、北京で企画され、昆明で実施されるという仕組みなどに原因があろう。

結び

中国の人類学は厳復の訳したトマス・ハクスリーの『天演論』（1897年）の刊行から数えれば、百年、蔡元培の論文「説民族学」（1926年）の発表から数えれば、80年あまりの歴史があり、舶来品から土着化を経て、自国の社会問題に積極的に参与する応用人類学の伝統を形成し、世界に発信する学問として成長している。今回の昆明大会を通じて中国人類学界は人類と自然、諸文化間の調和のメッセージを世界に発信した。

昆明大会は中国人類学民族学研究会（China Union of Anthropological and Ethnological Sciences: CUAES)を中心に中央民族学大学、中国社会科学院、雲南大学など複数部門も連携して実施したものである。CUAES（前身は1992年設立した中国都市人類学会）は政府機関である国家民族委員会所属の組織であり、1993年にIUAESの団体会員となり、中国のなかで唯一IUAESの会員である。会長は国家民族委員会主任、モンゴル族出身の楊晶氏である。この官学連携の構造は中国人類学界の特徴のひとつといえよう。

昆明大会の最後にオランダ・ライデン大学の都市人類学教授ピーター・J・M・ナス氏が新会長に選ばれ、次のIUAES第17回大会は2013年にイギリスのマンチェスターで開催されることが決まった。次回のテーマは「進化する人間性、新興の世界（Evolving Humanity, Emerging Worlds）」である。人類学発祥の地のひとつ、IUAESの第1回大会の開催地であるイギリスで開催される第17回大会が人類の可能性についてどのような新たな建設的、科学的知識を生みだせるか期待したい。

参考文献

国際人類学与民族学第十六届連合会大会組委会 2009『国際人類学与民族学第十六届大会　大会指南』昆明.

かん びん

民族社会研究部准教授
専門は文化人類学・中国研究
著書に『回応革命与改革：皖北李村的社会変遷与延続』（江蘇人民出版社 2007）、*Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform*（Senri Ethnological Studies 58, National Museum of Ethnology, 2001）、編著に『革命の実践と表象：現代中国への人類学的アプローチ』（風響社 2009年）、『大地は生きている：中国風水の思想と実践』（共編 てらいんく 2000年）など